

令和7年度（第64回）農林水産祭  
第42回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」  
【スマート農業技術とともに切り拓く地域の持続可能な農業】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和8年3月11日（水）13時30分～16時00分
場所	山形県山形市 山形国際ホテル 3階 富士の間
主催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和8年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

# 発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和8年3月11日（水）山形県山形市の山形国際ホテルにおいて『スマート農業技術とともに切り拓く地域の持続可能な農業』をテーマに、平成7年度農林水産祭農産・蚕糸部門の天皇杯受賞者である株式会社おしの農場の業績を取り上げて、約70名を超える皆様の参加者の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い約70名の方にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和8年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和7年度（第64回）農林水産祭  
（第42回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール	1
シンポジウム出席者	2
受賞者の業績概要	3
シンポジウムの記録	4



令和7年度（第64回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【スマート農業技術とともに切り拓く地域の持続可能な農業】

《スケジュール》

13:30~16:00

（敬称略）

- |                         |          |  |   |                |
|-------------------------|----------|--|---|----------------|
| 1                       | 開        | 会 (13:30)  | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事                               | 小栗 邦夫          |
| 2                       | 挨拶       |  | 農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課<br>技術政策情報分析官<br>山形県農林水産部技術戦略監 | 島津 久樹<br>佐藤 隆士 |
| 3                       | 選賞審査報告   |  | 農林水産祭中央審査委員会農産・蚕糸分科会主査<br>（農業・食品産業技術総合研究機構副理事長）     | 中谷 誠           |
| 4                       | 業績発表     |  | 令和7年度農産・蚕糸部門天皇杯受賞<br>株式会社おしの農場 代表取締役                | 押野 和幸          |
| ・・・休憩 (14:30~14:40) ・・・ |          |  |   |                |
| 5                       | ディスカッション | (14:40)  |   |                |
|                         |          | (登壇者)  |   |                |
|                         |          | ・コーディネーター  |   |                |
|                         |          | 中谷 誠 (3に同じ)  |   |                |
|                         |          | ・業績発表者   |   |                |
|                         |          | 押野 和幸 (4に同じ)   |   |                |
|                         |          | ・コメンテーター   |   |                |
|                         |          | 宮武 恭一 (農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査<br>（農業・食品産業技術総合研究機構農業経営戦略部長）) |   |                |
|                         |          | 中尾 克代 (農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員<br>（株式会社DX経営研究所代表取締役）)      |   |                |
|                         |          | 矢野 真二 (山形県農林水産部県産米戦略推進課課長補佐)                             |   |                |

(内容)

- ・意見交換、質疑応答
- ・総括

- 6 閉 会 (16:00)

※スマート農業技術体験コーナーは、12:00からシンポジウム開催前及びシンポジウム終了後から16:30とします。(農研機構のご担当の指示をお守りください。)

第42回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R8.3.11（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	押野 和幸	令和7年農林水産祭農産・蚕糸部門天皇杯受賞 株式会社おしの農場 代表取締役
コーディネーター 及び選賞審査報告	中谷 誠	農林水産祭中央審査委員会農産・蚕糸分科会主査 (農研機構副理事長)
コメンテーター	宮武 恭一	農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査 (農研機構農業経営戦略部長)
コメンテーター	中尾 克代	農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 (株式会社DX経営研究所 代表取締役)
コメンテーター	矢野 真二	山形県農林水産部県産米戦略推進課課長補佐
挨 拶	島津 久樹	農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課 技術政策情報分析官
	佐藤 隆士	山形県農林水産部技術戦略監
司会・進行	小栗 邦夫	(公財) 日本農林漁業振興会常務理事

## 農産・蚕糸部門

出品財 経営（大豆）

株式会社おしの農場  
（代表 押野 和幸）

山形県天童市



### 1 地域の概要

天童市は、山形県東部に位置し、内陸性気候の特色を持つ。農業産出額の約8割は果樹で、水稲は約1割を占めている。

### 2 受賞者の取組の経過と経営の現況

平成30年に「株式会社おしの農場」を設立し、その後も、耕作放棄地を無くしたいという思いから借り受けた農地の丁寧な管理を行ってきた。その結果、令和7年時点で経営面積は130haに達し、大豆（25ha）と水稲（105ha）を生産している。水稲では乾田直播栽培を拡大、令和元年に生産を開始した大豆では、栽培面積を年々拡大しながら高収量・高品質を維持している。経営面積の拡大と将来の経営継承を見据え、スマート農業技術を積極的に導入している。

### 3 受賞財の特色

#### （1）先駆的なスマート農業技術の導入

「ほ場生産管理システム」や「栽培管理支援システム」を導入し、作業員や農作物、ほ場状況をデータで見える化して管理。本システムを用いた取組は、スマート農業技術活用促進法に基づく「生産方式革新実施計画」の全国第1号認定となった。また、「ドローン」やトラクタの「自動操舵システム」を導入し、経験が少ない社員でも作業しやすい環境をつくとともに、作業省力化を図っている。

#### （2）女性の活躍

代表の長女と次女が同社に就職し、大豆や水稲の各作業だけでなく、事務経理やSNSでの発信など広報活動でも活躍している。スマート農業技術の導入によって女性でも作業しやすい環境となっている。

#### （3）農地の集積

集落農地の約3分の1を集積し、その大半は自社から2km圏内にあって効率的な作業を可能にしている。農地の貸主を第一の顧客と考えて管理していることから、地域からの信頼は厚く、農地の委託希望者は年々増えている。

#### （4）実需者が求める「里のほほえみ」の栽培

実需者から固定需要のある大豆品種「里のほほえみ」を栽培し、令和4～6年産の平均単収は313kg/10aと県平均の2倍以上、令和6年産の1等比率は99.5%となるなど、高収量かつ高品質な生産を実現している。

### 4 普及性と今後の発展方向

今後も離農者からの農地引き受けにより経営面積の拡大が見込まれることから、スマート農業技術をさらに活用し、省力的に作業できる大豆の栽培面積を拡大していく。また、経営や栽培管理については次世代への事業承継を進めるとともに、コスト削減や収量の安定化、社員の技術平準化、人材育成にも力を入れていく。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

只今から「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。皆様にはご多忙中のところ、参加していただき誠にありがとうございます。また、本日は、オンラインのでも、一方方向ではございますが、ご視聴いただけるようにしております。慣れない設営ではありますが、よろしく願いをいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様方に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと例年開催しているものでございます。

農林水産祭は昭和37年に始まり、今年度で64回目を迎える伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は、現在、7部門に分かれておりまして、過去1年間の各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました500近い出品財の中から、厳正な審査を経て、天皇杯、内閣総理大臣賞、農林漁業振興会会長賞、いわゆる三賞が授与されます。特に天皇杯につきましては、わが国では全部で30の天皇杯が授与されておりますが、ほとんどがスポーツ関係でございまして、スポーツ関係以外では農林水産祭で七ついただいているということで、農林水産業がまさに国の礎であり、ご皇室の熱い思いをありがたく思っているところでございます。

今年度も昨年11月、勤労感謝の日、元は新嘗祭の日でございますが、明治神宮で表彰式典を開催いたしました。本日は、農産・蚕糸部門で天皇杯を受賞されました山形県の株式会社おしの農場、代表取締役の押野和幸様にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また学識経験者の方々と意見交換をお願いしたものであり、天皇杯受賞後はますますお忙しくなったと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めましてお祝いと御礼を申し上げます。

それでは、本日は、共催いただいている農林水産省からは農林水産技術会議事務局の島津情報分析官に参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課

技術政策情報分析官 島津 久樹

紹介いただきました農林水産省の島津でございます。令和7年度、第64回になりますが、農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶申し上げます。

本日はお忙しい中、かように多数の皆様方にご出席いただき、誠にありがとうございます。まずはこの場をお借りして、株式会社おしの農場の皆様にご挨拶申し上げます。天皇杯受賞、誠にめでたうございました。本日、ご講演いただく押野様でございますが、立派な業績があるのはご承知かと思いますが、先々月、1月29日には皇居宮殿にお招きいたしました。天皇、皇后両陛下に御礼とご業績を自らご説明いただくという大役もお務めいただきました。とりわけ押野様におかれましては、天皇杯受賞者7組を代表し、陛下の前に皆より一歩二歩前を出て御礼を述べるという、非常に重責を伴う役をお務めいただきました。加えて、押野様にはさらに試練だったのではないかと思います。業績を説明する順番が、農産部門、園芸部門、畜産部門というふうに順番がありまして、農産部門が一番最初ですので、当然、陛下へのご説明も最初という順番になっております。緊張するなというのが無理な状況ではあるかと思うのですが、非常に落ち着いてご説明をされました。先月、むらづくり部門受賞者のシンポジウムの機会に伺った、受賞者代表の阿部様のお話によりますと、自分は最後で暇なので、皆さんがどれほど時間をかけて説明するのかを腕時計で計っていたところ、押野様は50秒だったそうです。宮内庁から指示された各説明者の持ち時間は全部で4分です。説明は1分以内で、残り3分強を陛下とのご歓談に充てていただきたい、そういった、よりご歓談に時間を寄せるという宮内庁の配慮です。そのため、受賞者はコンパクトな説明を宮内庁から求められており、その緊張の中で50秒で済ませた押野さんはすごいと、阿部様は大変賞讃しておられました。そういった大役も落ち着いてされている押野様でございます。

今回は、そろそろ雪どけも進むので、農作業準備も始まるのではないかとこの頃に半日お時間を取っていただきました。このことにも心から感謝申し上げます。

農林水産祭は、立派な農林水産業者に賞を授与することにとどまらず、その立派な業績を日本全国の農林水産業者の模範としていただくように、内容を周知・普及する、そういう役割の位置付けがございます。本日のシンポジウムもその一環でございますので、

それを快くお引き受けいただいたことにも感謝申し上げます。

押野様のご業績は、皆さん、粗々ご存じではないかと思いますが、本日はそれをご本人の口からご紹介いただくという貴重な機会でございます。押野様、本日は1分ではなく40分ございますので、ぜひ詳細なご説明をしっかりといただければと思っております。おしの農場と言えば、やはり一番知られているのはスマート農業です。特に効率化を図って、圃場管理システム、生産システムを活用し、130haをきっちり管理する。こういった点が評価されて、おしの農場は、スマート農業技術活用促進法に基づく生産方式革新実施計画の第1号認定となりました。

私もその昔、大臣認定、大臣登録のある法制度を運用しておりましたが、第1号に認定するというものには、やはり特別な思いが伴うものです。役人としては、挙がってきた順番に右から左へどんどん作業をしていけば済む話なのですが、やはり第1号というのは、後に続く方への模範となってもらいたいという思いがどうしても湧きますので、いろいろ悩みながら認定作業をするわけです。今回は、認定の後に天皇杯受賞という荣誉に至り、認定を担当した事務方も、やはり自分たちの選択に間違いはなかったと、今ごろ感慨に浸っているのではないかと思います。

天皇杯受賞の理由はスマート農業だけではございません。これから詳細を語っていただけると思いますが、地域農家を第一の顧客ととらえて、非常に信頼を得ているという実態。20代の若者が過半というような社員構成で、そういった若手社員のことにも配慮したルールを作っていたり、SNSで情報発信をしたりと、その業績に枚挙に暇はございません。詳細はこの後、ご本人の口から語っていただくことになるわけですが、もうすでにネットでも検索していただければ、おしの農場の業績というものはいろんなところで見つかります。ですが、それをご本人の口から語っていただいて、深掘りをし、疑問点なども俎上に乗せてディスカッションをする、これはなかなか巡ってくる機会ではございませんので、本日、皆様、こういった貴重な機会を積極的に活用していただければと思っております。

終わりに、おしの農場様を初め、関係者の皆様の一層のご活躍、ご健勝を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく申し上げます。

○司会 ありがとうございます。続きまして、シンポジウムの開催に当たりましては、山形県を初め、多くの関係者の方々に大変お世話になっております。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。本日は、山形県からは農林水産部の佐藤技術戦略監に参加いただいております。県を代表してご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】山形県農林水産部技術戦略監 佐藤 隆士

ご紹介いただきました山形県農林水産部技術戦略監の佐藤でございます。シンポジウムの開催に当たりまして、開催地を代表してご挨拶を申し上げたいと思います。

本日、令和7年度（第64回）農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」が盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、このような場を山形県で設けていただきました農林水産省を初め、公益財団法人日本農林漁業振興会の皆様など、開催にご尽力いただきました方々に心から感謝を申し上げます。そして、この後、業績の発表をいただきます株式会社おしの農場様におかれましては、これまで取り組まれてきた歩みに敬意を表しますとともに、天皇杯を受賞されましことを心からお祝い申し上げます。

おしの農場様は地域からの信頼も厚く、現在、地域の農地の約3分の1を集約されているということで、今後さらに経営面積の拡大が見込まれるとお聞きしているところであり、地域を代表する重要な担い手として活躍されております。また、作業体験の経験の少ない社員や女性の働きやすい環境を整えるとともに、積極的にスマート農業を導入し、大豆の高品質、多収生産を実現し、スマート農業技術活用促進法に基づく生産方式革新実施計画の全国第1号に認定されるなど、最先端の農業の先駆けとして取り組まれております。

本県としましても、昨年3月に策定しました第5次農林水産業元気創造戦略において、スマート農業の普及推進や担い手への農地集積、集約化促進を掲げておりまして、おしの農場様はまさにこれを実現されている模範的な経営体であり、今後の本県の農業を牽引していただきたいと考えております。

本日、シンポジウムにご参加の皆様におかれましては、引き続き、山形県の農林水産業の振興と活性化に向け一層お力添えを賜りますようお願い申し上げますとともに、本シンポジウムのご成功と皆様方のご健勝、ご活躍を心からご祈念申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。これから議事に入ります。まず、選賞審査報告を中央審査委員会、農産・蚕糸分科会の主査であります農業・食品産業技術総合研究機構の中谷副理事長をお願いいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会農産・蚕糸分科会主査 中谷 誠  
(農業・食品産業技術総合研究機構副理事長)

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました農産・蚕糸分科会で主査を仰せつかっております中谷でございます。どうぞよろしく申し上げます。

選賞の経過を報告する前に、今日は3. 11という特別な日でございますので、まずは15年前に震災で被害に遭われた皆様に心からお見舞いを申し上げます。

それでは、選賞経過報告に入ります。

先ほど小栗常務並びに農水省の島津さんからご紹介がありました、農林水産祭とは国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林漁業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるために開催されている式典でございます。昭和37年から実施をされております。ということで、先ほど来あ

りますように、令和7年度は64回目でございます。それで、こちら先ほどご紹介がありました、農産・蚕糸部門から女性の活躍部門までの部門がありまして、今回は農産・蚕糸部門で天皇杯をおしの農場様が受賞されたということでございます。




選賞の経過でございますが、まず選賞の対象にしたものは令和6年7月から令和7年6月の農林水産祭に参加している表彰行事において農林水産大臣賞を、チャンピオンですね、受賞された453点のうちの農産・蚕糸部門の63点を対象に行ったものでございます。選考委員会はここに書いてあるとおりの有識者で進めたところでございます。

経過でございますが、7月1日に農林水産祭の中央審査委員会が開催されまして、おしの農場様は、全国豆類経営改善共励会よりの参加でございました。ということは、農林水

【農林水産祭の趣旨】  
国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会の共催により昭和37年から実施。令和7年度は64回目。

【農林水産祭選賞部門】  
●農産・蚕糸部門 ●園芸部門 ●畜産部門 ●水産部門  
●林産部門 ●多角化経営部門 ●むらづくり部門  
●女性の活躍

【授賞区分】

 天皇杯	 内閣総理大臣賞	 日本農林漁業振興会 会長賞
---	--	--


【第63回農林水産祭選賞経過】

- ・選賞対象:令和6年7月～令和7年6月の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞した453点の出品財のうち、農産・蚕糸部門の審査対象数63点
- ・選考委員会  
<農産・蚕糸分科会選考委員>  
中谷 誠(主査:農研機構)、藤井孝夫(京都先端科学大学)、勝田真澄(元農研機構)
- <農産・蚕糸分科会専門委員>  
新田洋司(福島大学)、合志善隆(ヤンマーアグリ)、荒木琢也(農研機構)、近藤始彦(名古屋大学)、山田直弘(長野県農試)、伊藤美環子(農研機構)
- <経営分科会選考委員・専門委員>  
角田 毅(東北大学)、中尾克代(DX経営研究所)

産祭、ある意味でチャンピオン大会という位置付けでございますが、豆代表選手としてチャンピオン大会に出場されたという形でございます。それから第1回の農産・蚕糸分科会にて書類選考を行いまして、現地調査の候補を選定し、8月5日から18日に現地調査を実施させていただきました。それから

・選賞経過  
 令和7年7月1日 農林水産祭中央審査委員会  
 おしの農場は全国豆類経営改善共働会  
 より出品  
 # 7月10日 第1回農産・蚕糸分科会にて書類選考  
 現地調査候補の選定  
 # 8月5～18日 現地調査  
 # 9月1日 第2回農産・蚕糸分科会にて三賞選考  
 # 10月1日 農林水産祭中央審査委員会にて三賞決定

・天皇杯:株式会社おしの農場(山形県)



天皇杯授与式  
 (令和7年11月23日、明治神宮会館)


9月に第2回の分科会にて3賞を決め、それから正式には10月の農林水産祭の中央審査委員会にて決定されたということでございます。この間、先ほど申し上げましたように、おしの農場様は大豆の代表選手として農産・蚕糸部門に出場されたわけでございますが、この選考の過程で、現地調査も含めて、大豆だけではなくて、いろんな面で、経営の面でも、DXの面でもすばらしい経営であるということで、天皇杯に選ばれたわけでございます。

詳しいお話は後で押野様のお話があると思いますので、簡単にご説明しますと、平成30年に株式会社おしの農場を設立されて、まず耕作放棄地をなくしたいという思いから借り受けた農地の丁寧な管理を行ってこられました。その結果、令和7年度時点で経営面積は130haに達しております、大豆と

【令和6年度農産・蚕糸部門天皇杯受賞理由  
 ・受賞者の取組の経過と経営の現況】

平成30年に「株式会社おしの農場」を設立し、その後も、耕作放棄地を無くしたいという思いから借り受けた農地の丁寧な管理を行ってきた。

その結果、令和7年時点で経営面積は130haに達し、大豆(25ha)と水稲(105ha)を生産している。水稲では乾田直播栽培を拡大、令和元年に生産を開始した大豆では、栽培面積を年々拡大しながら高収量・高品質を維持している。経営面積の拡大と将来の経営継承を見据え、スマート農業技術を積極的に導入している。



現地調査: 同7年8月18日

水稲を生産されております。水稲では乾田直播を拡大し、また令和元年から大豆に取り組みまれて、年々、面積を拡大しながらも高収量、高品質を維持されております。それから経営面積の拡大と、将来の経営継承を見据えてスマート農業技術を積極的に導入されているということでございます。

それから受賞者の特徴、簡単に申し上げますと、まずは本当に先駆的なスマート農業技術を導入されているということ。それから先ほど来ご紹介がありましたが、そういう経験を通じて、スマート農業技術活用促進法による生産方式革新実施計画の全国第1号の認定となっております。具体的にはドローンの活用、あるいはトラクターの自動操舵システムといったスマート農業技術を導入されて、経験が少ない社員の方でも作業しやすい環境

を作るとともに、省力化を図っておられるという特徴でございます。

それからもう一つ大きな特徴でございますが、女性の活躍というところが非常に光ったという印象が残っております。代表の長女の方、次女の方が会社に就職されて、就農されておまして、大豆とか、水稻の各種の作業だ

けではなくて、事務処理、あるいはSNSの発信といった広報活動の面でも大活躍をされております。これも一つ、スマート農業の効果ではないかと思いますが、女性でも作業しやすい環境を実現されていることが大きな特徴でございます。

それから、三つ目、何と言っても大きいのは農地の集積でございます。集落の農地の現在3分の1を集積されておりまして、自社から2km圏内で効率的な作業を可能にしておりますし、地域からの信頼が非常に厚いということで、農地の委託希望者は年々増えていると伺っております。それから大豆

でございますが、実需者が求める「里のほほえみ」の栽培というところで、平均単収が313kg、これは実に大豆を触ったことがある方でしたらおわかりになると思いますが、すごい数字です。それから1等比率は99.5%と、高収量かつ高品質な生産を実現されているところもポイントかと考えてございます。

それから、普及性と今後の展開でございますが、今後も経営規模の拡大が見込まれるということで、さらにスマート農業を積極的に導入して、特に省力的な栽培できる大豆の面積などを増やしていくお考えと聞いております。それから経営、あるいは栽培管理については次世代への

#### ・受賞者の特色

##### (1) 先駆的なスマート農業技術の導入

「ほ場生産管理システム」や「栽培管理支援システム」を導入し、作業者や農作物、ほ場状況をデータで見える化して管理。本システムを用いた取組は、スマート農業技術活用促進法に基づく「生産方式革新実施計画」の全国第1号認定となった。また、「ドローン」やトラクタの「自動操舵システム」を導入し、経験が少ない社員でも作業しやすい環境をつくることと、作業省力化を図っている。

##### (2) 女性の活躍

代表の長女と次女が同社に就職し、大豆や水稻の各作業だけでなく、事務経理やSNSでの発信など広報活動でも活躍している。スマート農業技術の導入によって女性でも作業しやすい環境となっている。

#### ・受賞者の特色

##### (3) 農地の集積

集落農地の約3分の1を集積し、その大半は自社から2km圏内において効率的な作業を可能にしている。農地の貸主を第一の顧客と考えて管理していることから、地域からの信頼は厚く、農地の委託希望者は年々増えている。

##### (4) 実需者が求める「里のほほえみ」の栽培

実需者から固定需要のある大豆品種「里のほほえみ」を栽培し、令和4～6年産の平均単収は313kg/10aと県平均の2倍以上、令和6年産の1等比率は99.5%となるなど、高収量かつ高品質な生産を実現している。



現地調査：R7年8月18日

#### ・普及性と今後の展開方向

今後も継農者からの農地引き受けにより経営面積の拡大が見込まれることから、スマート農業技術をさらに活用し、省力的に作業できる大豆の栽培面積を拡大していく。

経営や栽培管理については次世代への事業承継を進めるとともに、コスト削減や収量の安定化、社員の技術平準化、人材育成にも力を入れていく



現地調査：R7年8月18日

事業継承を進めて、コスト削減や収量の安定化、社員の技術平準化、人材育成にも力を入れておられるということが主な受賞理由でございます。

以上、選賞経過と受賞理由のご報告をいたしました。ご清聴、ありがとうございます。

(拍手)

○司会 中谷様、ありがとうございました。続きまして、業績発表を株式会社おし農場の代表取締役の押野和幸様にお願いいたします。

**【業績発表】令和7年度（第64回）農林水産祭農産・蚕糸部門 天皇杯受賞  
株式会社おしの農場 代表取締役 押野 和幸**

こんにちは。おしの農場の押野でございます。不慣れなので、なかなか説明できかねるところもあると思いますが、後の質問のところもあると思うので、とりあえずは私どもの農場の紹介を兼ねて説明してまいります。よろしくお願いたします。

私ども、この山形の隣町の天童市で農業をしております、主産品目は果物。サクランボ、ラフランス、リンゴ、そんな感じの農業の中でも果樹にウエイトがある、そんな感じのところで、水田作をしております。

去年、130haで、今年は140haぐらいになるかな、そんなふうに思っています、このメンバーで圃場の管理をしているところでございます。

これが私どもの集落、ちょっと難しい漢字なのですが、高掬（タカダマ）と言いまして、この集落の周りの農地をお借りしながら、作物、大豆、お米を作っている、そんな感じなのですが、地域の農家の皆様、離農された方の農地をお借りしていることもあって、ほ



### 自己紹介

左：押野日菜子（姪）  
➡就農7年目

右：押野和幸（姪）  
➡就農5年目

ともに、山形県立農林大学校卒業

天童市農産物販売額（1984～2022）  
130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 0  
14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0  
●米 ●野菜 ●果物 ●畜産 ●水産

天童市の主な特産品  
西洋ナシ（全国第1位）  
有精粉（全国第1位）

### 会社概要

- 所在地：天童市高掬北213番地（事務所：天童市長岡1752）
- 設立年：平成30年3月
- 役員：3名（代表取締役 押野和幸）
- 社員：7名
- 面積：135ha（水稲110ha、大豆25ha）
- 米品種：つや姫、雪若丸、はえぬぎ、へこあおば

山形県  
天童市  
高掬北213番地（事務所）  
天童市長岡1752

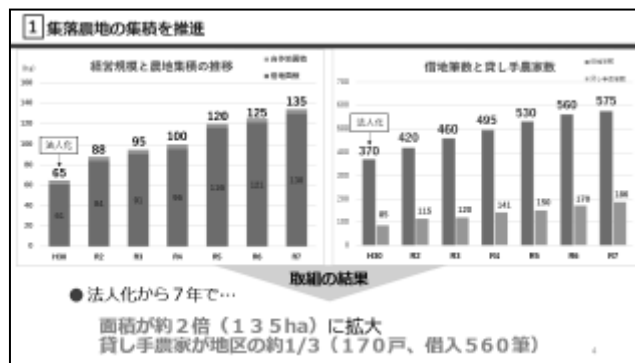
とんどが私どもの集落の周り、そんな感じに集まっているところです。色分けは品種ごととか、作物ごとに色分けした地図なので見づらいと思いますが、こんな感じに集まっております。

集積されている農家の方に言わせると、こんな近いところにこれだけの農地が集まっていいなと言う方もいらっ



しやれば、関係ない方は「何か隙間だらけで、どこか1か所にまとめたら効率がいいのに」なんていうことを言われたりもしますが、私どもではこんな感じに集まってきて、あとはその間を埋めていけば、さらなる効率化が図れるなど思いながら、場所柄もありつつ、こんな圃場条件、30a区画が基本で、小さいところはまだ10a区画、そんなところもある中で農作業をしております。

こんなふうが増えてきているのですが、法人化したころからグーッと増えてきているように見えますが、実際にそれは余り関係なくて、ちょうどそのころから農家の方々の高齢化がものすごく進んで、離農さ



れる人が増えている時期と私どもの法人化がちょうど重なったので、こんなふうに見えると思うのです。なかなかこれも大きい面積を押しえているなという方もいらっしゃるのですが、私は実は高校を卒業してからずうっと農家をしていまして、四十何年たっているのですが、私の農業人生一生をかけてもこの面積しか集まらなかったなという、農業の時間のスピードが遅いなというのがあって、そんなに面積を大きく集めて十分だなという感じはしていなくて、これからどうなるかわかりませんが、少しずつ増えていく、そんな感じかなと思っております。

これは皆様からまた変わっているねと言われるところですが、先ほど言いましたように、私が高校を卒業してから、ずうっとバブル景気がすごいときで、農業をする人が誰もいなかったのですが、兼業農家の皆さんがほとんどでして、1ha、2haクラスの農家の方がトラクターを持って、田植機を持って、コンバインを持っていて、乾燥機を持っている、そんな完結している兼業農家、そんな方がいっぱいいらっしゃるって、農地の集積が進まなく

て、何と申しますか、もうちょっと面積があったら思うような農業経営ができるのにな、そんな感じに思いながら、若いころをずっと暮らしてきましたので、農地の多さが経営の良さとは全然思っていないのです。土地利用型の農業をするに当たっては、ある程度、最低限度の農地がないと効率的な経営ができないなと思っていて、その思いがこんなふうに私が考えるようになった、

そんなことが原因かなと思っています。私の娘も家族も、また従業員も、結局のところは、地域の皆様の農地、地域の資源を活用させていただいて生活してきた、

そういうことがあって、それが間違いない事実であるので、やはり地域の地主の皆さんには本当に感謝をしているし、これからも恩返しをしたいなという思いがあって、こんなふうに社員に日々言い続けているのです。何か古くさい感じもするのですが、私が古い人間かもしれないのですが、私はこれが大事だなと思っています。それは娘にも厳しく、私の会社にとって一番大事なものは何かというのをきちんと理解してもらいたいなと思っております。

これは作物別なのですが、先ほど大豆でコンテスト1位になったのがこの天皇杯のきっかけであるわけですが、私ども、意外に大豆のことを余りしゃべる機会もなくて、また、技術的な面


でも、ものすごく、岩手、宮城、北海道みたいな、そんな大豆作をしているわけでもなくて、こんな感じで、25haぐらい。少しずつ増えているのですが、ウエイトとしてはそんなに多くないのです。でも、その大豆においては、私の経営の中でこれから面積が増えていたり、人材確保が難しくなってきたり、そんな場面が想定されているので、小麦は今やめているのですが、畑作物というのが、稲作をする上でもものすごく大事なウエイトを占めていて、きちっと大豆が作物として利益を上げられるように、そんな思いでしております

**1 集落農地の集積を推進**

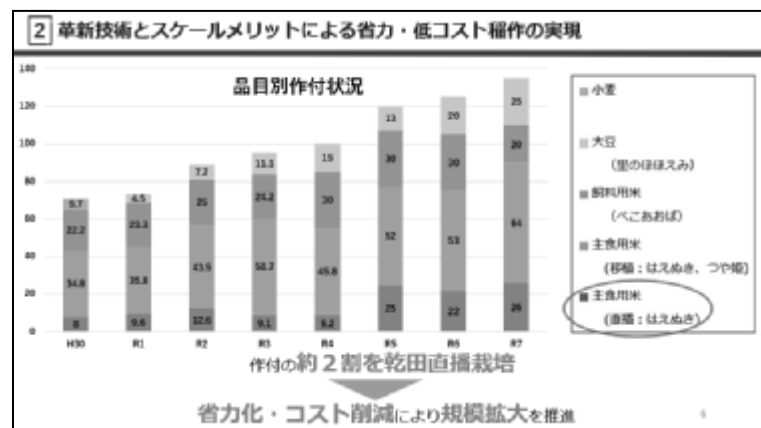
**お客様は誰？**  
**お客様 = 農地を預けてくれる地域の農家**  
 お客様に必要とされる会社になろう！

**経営理念** **「あなたの田んぼ、守ります」**

田んぼの管理でお困りの方へ  
 ていねいに、心を込めて  
 地域の皆さんのささえになれるよう  
 大切な田んぼを守ります。  
 どうぞ安心して、私たちにお任せください。



HPにも掲載



す。

あと、もう一つ、私どもの地域の中で珍しいのは、乾田直播が入っているのがちょっと珍しいかなと思います。山形は雪国なので、太平洋側、関東、そんなところと違って、春の雪どけが遅いので、春作業が非常にタイトになって時間がないという中で、なかなか乾田直播を入れるのが難しい、そういうことでなかなか増えてこないんだろうなと思っています。温暖化もありますし、さまざまな乾直のやり方が出てきまして、技術も出てきまして、私どものところはV溝の愛知方式がうちの経営に合っているなということによってどんどん増やしているのです。やはり希望の持てる技術だと思っています、田植えしないで済むんだったら、それに越したことはないなと思って、本当にこれも大事に、大事に、10年以上、15年近くかけて、少しずつその技術を磨いてきて、今、その現状、データを見ると、私どもの収量は乾直が移植より収量が高くきています。この前、娘とその原因を分析したのですが、田植え時期が1週間、10日以内に終われば収量は確保されるのですが、田植え時期がちょっと遅れたりすると、やはり収量が落ちてよくないということがわかってきた。それが直播の場合には、温暖化の影響もあるのかもしれないですが、断然、収量が落ちないです。だから、うちの経営の中ではこれを多分どんどん増やしていくのだろうな、そんなふうには思っております。

これも私どもの一番のスマート農業といえますか、スマート技術の核心部分で、これは圃場管理ソフト、これはクボタさんですが、いろんなメーカーのものを皆さんお使いになっていると

3 大規模稲作を支えるスマート農業技術

### 1 圃場生産管理システム (KSASの活用)



KSAS画面を確認しながらのミーティング風景

- 若い従業員の増加
  - ・GPSで現在の位置を確認。入社1年目でも圃場位置を間違えずに作業ができる。
  - ・リアルタイムで作業の進捗状況を把握し、
  - ・的確に作業指示ができる。
- 増え続ける圃場管理が大変
  - ・作業管理の見える化、作業データの蓄積

【作業者、作業日、作業内容、使用機械、使用農薬・肥料の名称・使用量、作業時間が記録】

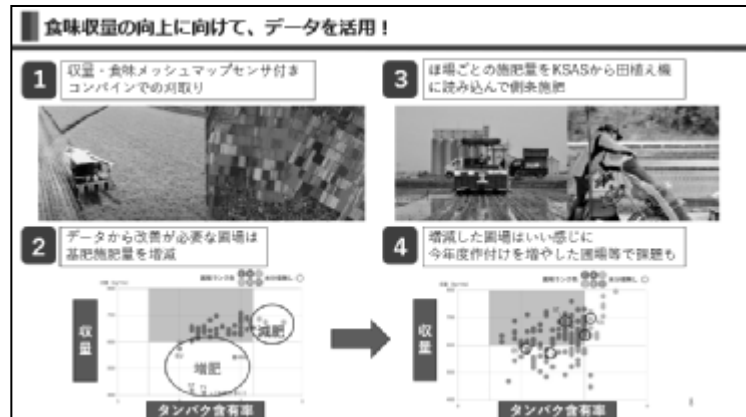
● 次代の役職員の有益な経営管理の指標として活用

思いますが、私どもは機械がクボタだったこともありまして、これを使っています。データをどう活用するかという前に、一番初めにこれを入れたときに、社員の皆さんがきちんと日々のデータを田んぼで入力する、それを習慣づけるのが大変でした。若い社員はすぐに覚えまして、ピピッとするのですが、3年くらいかかりました。でも、今はみんな仕事の一環としてきちっと作業履歴をつけるようになったので、うちのデータも10年近くあるのですが、だんだん正確性が高まってきたかなと思っています。

使い方としては、一番初めに田んぼの地図がわりに新入社員の皆さんに見てもらえば、

田んぼを間違えないかなと思いながら入れたのですが、データがだんだん増えるにつれて、そのデータがものすごく便利がよくて、そのデータを見ながら、日々、水管理や、雑草管理や、肥培管理に、社員一人一人がスマートフォンを見ながらうまく活用できるようになってきたかなと思っています。そのデータが多分、今、若い社員との引き継ぎに入っているのですが、その引き継ぎをするに当たっても、数字で見える化したデータというのがものすごく貴重で、事業所を経営する上でも、こういうさまざまな管理のシステム、データの蓄積が大事だなと思って、今、データを取っていて本当に良かったと思っています。

これは収量、品質に向けて利益を上げる面でデータを使っている、そういうことの絵なのですが、これはクボタさんですが、コンバインで収量データを把握しながら、その減肥を次の年に反映させるというのが一つあって、2年くらい前から試験的に始めていて、去年、効果があるなということがはっきりわかったので、8年度からは全面積、1筆、1筆ごとに、社員みんな



ここは増肥、ここは減肥、ここはどうすると話しながら、今、データをほぼ打ち込み終わったので、春はそのデータを田植機に入れば、増肥、減肥、すべて自動でなるようにしています。多分、今までの結果もよかったので、これもいい結果が出るかなと思って期待している今年一番のことです。意外に収量が高かったなと思って、自分でも自惚れていたのですが、実際、こうやって分析してみると、非常に収量が低いところがあるので、そこをどうにか底上げしたいなというのが私の会社の今年の目標です。



これは皆さんもお使いのとおり、衛星から取ったデータを見ながら、これは地力マップかもしれないのですが、そんな感じで、これを活用する方法は、私どもは田植機で可変施肥しているのですが、その上で微調整をするためにもドローンの可変施肥、その目的で一

番使っているのではないですかね。あとは、生育の時期の判断、いつごろ出穂する、いつごろ花が咲く、そんな感じの大体の予想もできるので、そういうのが若い社員にはものすごく響いていて、結構、みんな見ながら、次の防除の時期なりを話し合っているみたいです。

ドローンですが、うちの社員は入ったらすぐ免許を取らせるのですが、私はもう年なので、こんなおもちゃみたいなものは余り信用してなくて、とりあえず使ってみようということから始めました。でも、使ってみると、ものすごく

便利がよくて、費用対効果の面でもブームスプレーヤーから見れば断然安いし、能率から言えばブームスプレーヤーの何倍も仕事をするし、ものすごく便利がよくて、うちの娘たちも楽しいかわからないですが、若い男の社員などは率先してドローンの作業をするところを見ると、作業の効率性もありますが、そういうおもしろいことも取り入れていくのが若い社員にとってもいいんだなと改めて思ったところです。本当に便利です。余り使い過ぎて、私のところでは2年ぐらしかドローンがもたなくて、今は2代目のドローンと3代目のドローン、その2機体制でしてしまっていて、便利よく使っています。


これも自動操舵ですが、私どもの長辺は長いところで100mぐらいしかないので、100mぐらいの小さい圃場で、ただ直進するだけの自動操舵は意味があるのかなということを入れるのが遅れたのですが、年配の社員も、前を見てい

ればいいのだから必要ない、そんな意見もあったので遅れたのですが、1台入れてみると、ご覧のとおり、大変便利がよくて、オペレーター、働く人がものすごく楽だと言うのですね。働く人が楽なら最高だと思って、今、すべての機械、ハンドルのついてるものは自動操舵を入れて使ってもらっています。もちろん楽になることもあるし、大豆なり、これは乾直なのですが、精度を上げるという面でも、やはり人間の手では負えない、そんな

**3 大規模稲作を支えるスマート農業技術**

### 3 ドローンの導入

- ・オペレーターは5名（うち女性2名）
- ・除草剤、防除、追肥（可変施肥）、稲わら腐熟剤の散布に活用



- 適期作業が可能に！
- 女性でも面積をこなせる！

**3 大規模稲作を支えるスマート農業技術**

### 4 自動操舵システムの導入

トラクターにGPS受信機・ハンドル・モニターを取付け、ハンドルを自動で制御するシステム

- 作業負担の軽減
  - ・ハンドル操作に集中する必要がない
  - ・オペレーターの疲労が軽減される
- 誰でも操作可能
  - ・操縦が苦手・初心者でも真っ直ぐ作業可能
- 作業効率アップ
  - ・設定した作業幅の幅で作業
  - ・作業跡が分かりづらい作業でも重複を防止



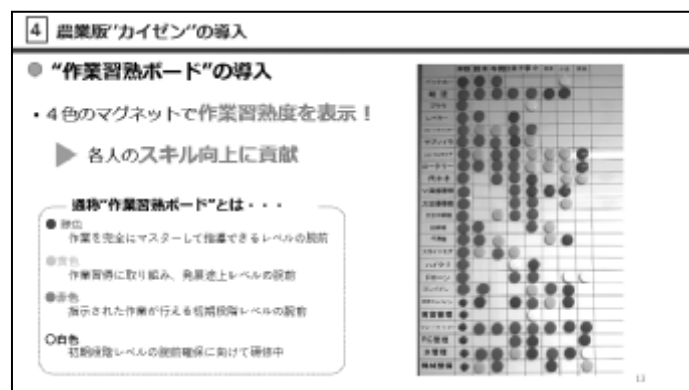
すごい精度を出してくれるので、これもやはり皆さんが言うとおりのいいんだと、改めて確認して、うちの地域でも今どんどん自動操舵が入っています。

これはトヨタの「カイゼン」で、山形県の普及員の皆さんがトヨタの「カイゼン」を農家に落とし込むということで、様々な研修を受けられたみたいで、それが実際どうなんだということで私どもに初めにお声をかけていただいた。



これは多分後片付けなのですが、こんな感じでしてみました。これもやはり当たり前のことなのですが、ただの農家であったので、余り片づけ方が不得意だったのですが、それをこんな感じにちゃんと整理整頓すると、社員同士が揉めることもないし、便利がよくて、やはりスマートなだけではなくて、きちんと会社をしていくにはこういう当たり前のこともしなければならないなと思って、これも便利よく、普及員の先生には感謝しているところです。

これもトヨタの「カイゼン」で普及員の先生から教えてもらったもので、その1人1人の能力の見える化で、社員のモチベーションも上がりますし、私ども経営者側にとっても、大体ど



んな作業を誰ができるのかというのが目に見えてわかるので、今度はどんな機械を教えたらいいのかとか、そんな感じでうまく使わせてもらっています。ただ、これはまだボーナスの査定とかには反映されていないので、自分勝手につけて、それを先輩社員が「だめだよ」と元に戻したり、さまざま楽しく使わせてもらっています。

これも私どもの農場での問題ですが、ちょっと私も年がいていまして、事業を引き継ぐという段階でいろいろ悩みが多いところで、こんな感じで今悩んでいるところです。見てもらおうとおり、もともと農家は家族経営なものですから、とりあえず法人化してみて、法人と言っはいますが、こんな感じに、お父さん世代と子ども世代がはっきり分かれています。それは社員も30年間のブランクがあって、それをどうしようかなというのが今の

私どもの課題です。

でも、こうなったら仕方がないので、この中でどうにか引き継ぎたいなということをし始めて、60歳から始めて、いま62なので、3年目に入

5 次世代に継ぐ後継者の育成と経営継承									
● 経営の継承 ▶ 父65歳で経営をバトンタッチ ＜現在の役員構成＞									
氏名	押野和幸	押野由己	Sさん	Tさん	押野白菜子	押野幸々	Sさん	Kさん	Sさん
年齢	62歳	57歳	57歳	62歳	27歳	25歳	25歳	22歳	27歳
経験年数	44年	—	19年	8年	7年	5年	4年	2年	1年
経営主との関係	代表取締役	取締役(妻)	従業員(義弟)	従業員	専務(長女)	従業員(次女)	従業員	従業員	従業員
主な部門	作業全般 経営管理	事務総務	稲作・大豆	稲作・大豆・機械整備	稲作・大豆・事務・広報	稲作・大豆	稲作・大豆	稲作・大豆	稲作・大豆・機械整備
労働保険・ 社会保障	加入								
● 経営の継承に向けた準備 ▶ スマート農業技術の積極的な導入									
<ul style="list-style-type: none"> <li>・KSASによる圃場管理システムを導入して、作業の見える化を実践</li> <li>・血縁型“カイゼン”活動の実践による作業の効率化を推進</li> <li>・労務管理・会計事務について、母から伝授</li> </ul>									

るのですが、どうなることやらということです。でも、さっき話していたデータの蓄積がきちっとなっているのも、もしかすると、意外と簡単にバトンタッチできるのかもしれないし、できない可能性があるのは、私が社長の椅子にしがみついて離せないとなった場合には無理だなと。それは皆さんに笑っていただければよくて、うまくいっても、失敗しても、普及課の先生方にデータを取ってもらって、もしかしたら成功事例になるかもしれないし、失敗事例になるかもしれないですが、うちの引き継ぎをじっくり見てほしいなと思って、皆さんには言っております。

こんな感じを出しているのですが、私は娘、2人しか子どもがいないので、こんなふうになったのですが、女性を率先してというわけではなくて、うちが娘

5 次世代に継ぐ後継者の育成と経営継承	
<b>● 女性の積極的な活動</b> ※ともに山形県立農林大学校在学中、無人ヘリ・ドローン・大型特種運転免許・けん引免許も取得 <b>長女(令和元年入社)▶ 水稻全般の作業管理 事務経理業務、広報事務</b> <b>次女(令和3年入社)▶ 大豆を担当し、は種～収穫・調製の作業管理</b>	
	
<p>女性だからできない仕事はほとんどなくなり、どんな作業も男女の区別なく分担して仕事に従事</p> <p>近隣の農業者の「農業に対する意識の変化」</p>	

だったからこんなふうになってきたということも大いにあるので、私の娘以外には女性社員はまだ入れていません。今のところ、男の子が3人入っているのですが、今度は多分、そろそろ女性の方も入りたいという人が出てきそうなので、そんな方が入るときが来るのかなと思っています。女性の方はいっぱいいらっしゃるのですが、言葉を選んで話すのは難しいのですが、私はもともと農家をしてきたので、頭の中の感覚が抜けなくて、女の子が果たして農業ができるのかということは、うちの会社に娘を入れるときに一番悩んだところなのですが、どうしてもしたいということなので、男性社員の補助的な感じの仕事ができればいいなという感じが入れたのです。うちの娘だからということではなくて、一般の女

性の方が私どもの会社に入ったとしても、やはりやらせてみると、全然問題なく、男性社員と変わりなく仕事ができると思うし、できることに、私自身もびっくりしています。それはやはり機械化も進んでいますし、様々なスマート農業が入っている中で、ドローンもしかり、そんな中で、農業の様々な分野がある中での土地利用型の農業であっても、問題なく、女性が活躍できるのではないかな、そんなふうに思って、皆さんにもいろんな場面でお伝えするようにしております。

これは私の事務所で、うちの娘が就農したこともあると思いますが、男女別のトイレがあり、男女別の更衣室も作って、きちんと休憩室を作ったのは、やはり若い社員も



次々入ってきた中で必要だなということで、便利よく使っております。それは私たちの社員、22歳の子も二十歳くらいから入ってきている中で、親御さんたちから納得してもらわなければならないということもあって、福利厚生面できちんと目に見える形で、親御さんに、これくらいの気持ちで、会社としては社員の皆さんに福利厚生をきちんと考えているのだよということを見せるための施設でもあって、結果的に若い社員がずっといてくれて、増えているということは、こういうふうな施設、設備も、雇用する上においては、トラクター、田植機と同じように必要なのではないかなと思うところでございます。

これは、娘が趣味なのかどうかわかりませんが、いろいろ発信していきまして、いろんな場面でいろいろお声がけもいただき、娘も嫌いじゃないからしているのでしょうか、いろんな方



とつながりあえていいのだろうなと。私の時代にはなかったもので、羨ましいなと思っています。私たち農業界といいますか、地域の中においても、特に農業において、女の子が様々な表場面に出て行くというのが少なく、お声もなかなかかかからないので、私の地元

でも、多分、娘は7年、8年しているが、様々な組織の方とのつながりもないし、地域の若い農業者の方との関わりは全然ないので、外に、外に向けて、いろんな人とつながりたいとなっているんだと思います。私が様々な部会なり何なりの会長をしている中で、男性ばかりの会をずっと続けてきましたので、そんな中に女の子を入れようかとなった場合に、やはりちょっと躊躇するのわかるので、今から少しずつ変わっていけばいいなと思っています。研修旅行や何かにお父さんたちが行く中で、女の子が入ってはちょっとよろしくないなという場面もあるような気もするし、それは多分、今からどんどん変わっていくのだらうと思います。今日、娘も来ていますので、何かありましたら、私は余りわからないので、娘のほうに話しかけていただければありがたいと思います。

うちは、そこまでかっこういいことではないのですが、どうにか地域の中で、私どもも農業をしてきましたし、これからの若い私どもの社員もずうっとこの職業で生きていきたいなという、その思いが

今後について
経営理念である“地域農業の守り手”として、 高橋集落の農業発展のために事業を持続的に展開
貸主の意向に沿った “安心できる条件での賃貸契約” “借りた水田の丹精込めた管理”を これからも続けていく

あって、このようなことを考えながら、こんなふうに進めております。時代が変われば、多分そのやり方も変わっていくのだらうし、これが全てではないのですが、やはり私どもの仕事は土地を基盤にしていますし、その土地はどこからか持ってくるわけにもいかないし、山の中に行ってできる仕事でもないので、いつまでたっても、この場所で、この田んぼから離れずにしか経営できない、そんなふうな仕組みを持っていると思いますので、なるべく将来とも地域の皆さんと、いい按配に、お互いよい方向に向かうような、そんな関係を築けたらいいなと思っています。今後は、私もあと何年かで娘に引き継ぐので、これがどうなるかは私も楽しみだし、娘たちのグループ、若い、20代の社員がこれからどんな農業をしていくのか、同じようなことをしてほしいとは全然思っていないですし、どんなことをするのか、それが私は楽しみでならないし、若い社員たちに私ども年配の社員も期待しながら、心配しながら、日々いろんなことを教えているみたいです。こんな形で私どもの紹介は終わってしまいましたが、これからまだ時間もありますので、わかることはすべてお答えするつもりで来ましたので、質問なりをしていただきまして、今日を実りある会にいただければなと思います。どうもありがとうございました。つたない説明ですみ

ません。（拍手）

○司会 押野様、ありがとうございました。ここまで2件のご報告にご質問などもあろうかと思いますが、後ほどパネルディスカッションの中で会場から参加いただく時間もありますので、その中でお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩をいたします。なお、会場の後ろ側には農研機構から提供いただきましたバーチャル空間での機械の操縦体験という機器が用意されておりますので、休憩時間は短いですが、ご覧いただければと思います。再開は14時40分といたしますので、それまでにご着席をお願いいたします。

（ 休 憩 ）

○司会 再開いたします。これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして中谷主査をお願いいたします。

### 【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会農産・蚕糸分科会主査 中谷 誠

それでは、パネルディスカッションを始めます。進行は私、中谷が務めさせていただきます。

まず、パネラーの方をご紹介します。皆さんから見て、私の右から、今、お話しいただきました受賞者であります押野さんです。それから、そのお隣、農林水産祭中央審査委員会の経営分科会の主査を努めております、私と農研機構の同僚で、農業経営の研究者の宮武さんでございます。それから、同じく中央審査委員会経営分科会の専門委員を務められております株式会社DX経営研究所代表取締役の中尾先生でございます。それから、そのお隣、県のお立場からコメントをいただきたいと思いますが、山形県農林水産部県産米戦略推進課課長補佐の矢野様でございます。

それでは、このメンバーでパネルディスカッションを進めたいと思います。このパネルディスカッションですが、まずは様々なご専門の分野の方がいらっしゃいますので、それぞれのお立場から、あるいはそれぞれの角度から、押野様の経営に関してコメントをいただいて、さらに、そこについて押野様からお答えをいただくという形で討論を深めていきたいと考えております。

まず宮武さんに、農業経営という視点から今回の受賞の件についてコメントをいただい

て、ご質問をいただいて、討議を進めたいと思いますので、まずは宮武さん、お願いします。

○宮武（コメンテーター） 農研機構の宮武でございます。農林水産祭では、経営多角化分科会を担当しておりまして、経営的な視点から受賞経営の内容を見せていただいたところでございますが、ここでは経営全般についてまずコメントさせていただきたいと思えます。

おしの農場は、集落の田んぼを守りますという経営理念のもと、スマート農業技術を活用した効率的な水稻、大豆の生産を行い、経営面積を平成30年の70haから令和7年まで7年間の間に135haへと倍増させるとともに、今日、ご紹介がありましたように、K S A S であるとか、ザルビオを用いた農業の見える化と、作業タスクごとに技能を磨く人材育成によって若手従業員を確保、育成してきた先進的な経営だと思います。

このうち、水稻については、スマート農業の活用に加えて、山形県の品種であります「雪若丸」、「つや姫」、それから飼料用品種である「べこあおば」、こういった早生品種、中生品種、晩生品種をうまく組み合わせることで、26haもの面積で「はえぬき」のV溝直播を行うことで、8条の田植機1台、6条のコンバイン1台で、110haの田植えと稲刈りをこなすなど、極めて効率性の高い作業体系を構築されております。

また、収量・食味付きのコンバインであるとか、ザルビオなどを活用した可変施肥によって、全国でもトップ品種になります「つや姫」の高品質生産と高反収を両立されております。さらに飼料用米については天童地区の養豚農家さんと国産飼料クラスター協議会を作って、その耕種部門を担当するなど、耕畜連携に取り組んでいる点も素晴らしいことかと思えます。

それから大豆につきましては、水利の良くない田んぼなどを中心に、固定した圃場での栽培をされているのではないかなと思えますが、本暗渠を施工して、さらにサブソイラーやスタブルカルチをかけて、圃場内に明渠を掘るといった徹底した排水対策を行ったこと。それから鶏糞を100kg施用されている。さらにドローンを使って開花期前に追肥をされているといったことによって、先ほど中谷さんもおっしゃっていましたが、都府県平均の2倍に当たる300kgの高反収を得ている点は極めて優れた成果を挙げておられるなと思えます。

それから、自前大豆の乾燥機、倉庫、こういったものを建設されて、地元の味噌加工業者に大豆を供給するとともに、今後は独自ブランドでの販売なども目指していらっしゃる

るとお伺いしております。

以上のような取り組みから見ても、おしの農場は天皇杯の受賞にふさわしい経営と判断されますが、ここで幾つか質問をさせていただきたいと思います。

まず、ザルビオで得られた地力とか、収量などのデータを、ほかの生産者とか、事業者と共有して、解析結果を翌年以降の施肥管理に活用しているということが資料に書かれておりましたが、これは稲作部会とか、K S A Sの友の会とか、そういった組織化した取り組みとして行われているのでしょうか。それとも、個人の発意で進められているのでしょうか。その辺を少しご説明していただければと思います。

それから、大豆については、取り組み7年目になって、連作が続いている圃場もあろうかと思いますが、連作障害など、減収の傾向は出ていないのでしょうかということです。

それから、宮城県などでは子実トウモロコシの取り組みが始まっていますが、こういった畑作物との畑輪作についてはご検討されていないかと。もし今後そういう取り組みをされるのであれば、やり方などを教えていただければ参考になると思います。

それから、スマート農業については、省力化、増収、これを目指すだけではなくて、経営管理に活用するというのが、おしの農場の優れた点でございますが、このうち、オペレーションについては、アシスト農機であるとか、K S A Sを農業経験の少ない新人の育成に活用しているわけですが、今年度、内閣総理大臣賞を受賞した愛知県の千姓さんでは、新入社員の作業能力向上に作業の画像データ、作業をやっているところの画像データを積極的に活用されています。おしの農場さんでは、そういった取り組みもされていれば教えていただきたいと思います。

それから栽培管理の判断に圃場ごとの肥沃度であるとか、作物の生育ステージの情報などを活用しているわけですが、こういう情報がたくさん集まってくると、判断を生成AIに任せてしまうとか、そういう可能性はないのかなということをお聞きできればと思います。

最後に、農地面積がさらに増えた場合は、たとえば田植機やコンバインを2台に増やしたり、ライスセンターを増設したりすることが必要になってくるかなと思います。そういった経営トップの判断において、たとえば今、農研機構では農業経営計画策定支援システムといったツールを開発して、意思決定を支援する取り組みを進めていますが、そういったツールであるとか、経営コンサルタントの助言を得たりということ、将来の経営判断とか、次世代の経営者の育成に活用するとか、そういうアイデアがあれば教えていただき

たいなと思いました。

たくさん質問して申し訳ございませんが、以上でございます。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。たくさん連続して質問されてお答えにくいかと思いますが、よろしく申し上げます。それから、もしあれでしたら、適宜ご質問いただいても結構ですので、よろしく申し上げます。

○押野（業績発表者） ありがとうございます。初めに、ザルビオデータの連携。今、第1号で認定を受けたのもザルビオなどのデータを共有しながら技術を上げていくということなのですが、センサス式にしているわけではなくて、私の隣村にもう1人、農業をしている若手がいまして、その子が特に詳しくて、その子が隣村なので、意外に圃場なども隣接していたり、入り組んで、交互に入っていたりすることがあって、それを一気にこの地域の土質はこうだとか、こんなふう施肥したら、こうなると、実際のところの情報を共有して教え合いながらといいますか、そんな感じで勉強しているのです。そうすると、やはり1人で得たデータの倍、3倍のさまざまな知識が得られるので、ザルビオを活用するにしても便利がいいし、一緒にする仲間がいるといいなど、それはつくづく思います。

次、大豆の連作ですが、国のほうで5年水張りが出ましたので、私どもも2年間にわたり、ローテーションを始めていました。今回、またそれがなくなったということで、また固定化するのかなと思っています。さっき言ったかわからないのですが、私ども、大豆で賞をいただいたのですが、一応、お米のサブ的なところがありまして、水稻をするに用水の便が悪いところ、耕作放棄地で、畔も何もないところ、そんなところを大豆に振り分けて、水稻の収量を減らさないということも一つの目標として大豆を作っているのです。やはり連作していますので、地力の低下はもちろんあると思うのですが、それに関しては私の地域はものすごく地力が高い、そういう土地柄なのか、急激な地力の低下は連作してもなかなか起きない。少しずつ収量は落ちていきます。令和7年度の収量を集計したところ、25ha平均が304kgでした。なので、少しは下がっているなど思っているし、やはり雑草がどこの地域の皆さんに聞いても苦労しているということなので、うちも連作が続けば、大豆の産地で困っているようなことが必ず起きてくるのだらうなということを考えまして、今、雑草対策をいろいろ聞いています。その一つとして、やはり畑作の連作、トウモロコシ、そういうのはもちろんものすごく有効であるというのは、私も試験的に子実トウモロコシは4年くらい作っているのですが、除草体系が違うので、合っているなどは思うのですが、その途中に5年水張りが出てきましたので、それで子実トウモロコシがちょっとこけまし

て、来年、水稲するところに子実コーンを入れるのも嫌だなと言いながら、ひどいところは水稲に変えたローテーションをしていました。でも、また固定化してくるとなれば、国の政策もあろうとは思いますが、子実トウモロコシが採算ベースに合うようなことに何とかできるようであれば、私どもは水稲、大豆のローテーションよりも、大豆、子実コーンのローテーションのほうが効率的だな、そんなふうに思っています。

あと、スマート農業の継ぎ手、取り組みなのですが、一番は何がいかって、若い子どもたちがデータの数字を見ながら作業をして、モヤモヤ悩むことがなくていいのだろうなと思っています。現場に連れて行って、予習とかもするのですが、なかなかそれが難しいし、収量コンバインのデータなり、もしくはザルビオなり、K S A S さんの衛星データなりもちゃんと見えるようになっていて、子どもたちは迷いもなくできるということがあって、すごくいいし、そのデータが残っているので、私がポックリいっても、7割ぐらいの仕事は新人の子でもできるんじゃないかなと、これまでの結果を踏まえた自信になっていまして、それも事業所を経営した中で、そのデータがあれば、私たちベテラン社員と同じような収量を上げていなくても、7割、8割の収量がとりあえず上げられれば、経営は破綻なくて、若い子たちがスキルアップしていければそれでいいな、そんなふうに思いながら、スマート農業は次の世代に向けて教えたり、こんな思いだつたりを伝えております。

栽培管理、A I の話はものすごくおもしろくて、それは理想的だなとっていて、クボタさん、いっぱいいらっしゃっているのも、是非そっちのほうも一生懸命お願いしたいなとっております。やはり先ほど言いましたように、まずデータを取り入れまして、私ども、そのデータを今年の収量増にどう結びつけるかというのが難しく、収量コンバインはさっき出たのですが、果たして何が原因で収量減になっているのかというのは収量コンバイン、衛星だけではわからなくて、それは社員全員が集まって、田んぼ1枚ごとに、この圃場の収量の減の原因を解明しながら、原因を究明しながら、肥料増なり、雑草対策なり、やはり水が来なかつたりして減収もあったみたいなので、それはやはりまだアナログなので、そういうのをA I を活用してもうちょっと楽になれば、それは本当に机の上ですべて完結するようなすばらしいことで、楽しそうだなと思いました。

同じように、設備投資に関しても、今、私、悩んでいるところで、どういった計画を立てて、利益のうちのどれぐらいの按配で投資に回していくかというのが難しく、それは銀行さんあたりにもソフトがあつて、それを聞きながらしているのですが、今までは肌感

覚でしていました。今までは人も少なかったし、さっきおっしゃられたように、最低の機械設備投資で最高の利益をとということで、楽しくて来たのですが、今、社員も増えてくると、機械の設備のお金よりも、社員人件費、機械が故障したときに遊ばせておく、何もできない時間を作るのがもったいないということで、やはり機械を増強して、社員の方たちが効率的に作業をしてもらったほうが経営面ではいいなと、今のところは判断していて、今は利益だけで押すのではなくて、きちんとした設備投資をしたいなというふうに考え始めた。大豆もありますので、大豆も増やすという中で、大豆の乾燥施設も今は建てる準備をしております。まだコンサルタントは使っていないのですが、銀行さん中心に経営の面ではいろいろ相談しているのです。それもさまざまな機械があって、パソコンでいろいろできるのがあれば、とりあえずの考え方、将来を見るためにも、子どもたちには有益だなと思って、あったら、ぜひ教えていただきたいなと思っております。

以上です。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。日菜子さん、何か補足することはありますか。

○押野日菜子（おしの農場） 株式会社おしの農場の長女の押野日菜子です。私も、最後の経営面についてですが、やはり事業継承をするに当たって、技術の面ではスマート農業も進んできて、データを共有したりだとか、データに残して活用することが進んできたので、技術の面に関しては引き継ぎやすいと感じているのですが、経営の面に関しては、私も父と母と一緒に、今は銀行さんと一緒になって、会社のSWOT分析から経営の中身というか、具体的なところまで一緒になって教えてくれているのですが、そういう管理だったりもっとスマート化というか、分析をもっとしやすくなってくると助かるなと個人的には感じています。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。すごく次に行きやすいのですが、今、日菜子さんからありましたように、経営面のスマート化という視点で、デジタルトランスフォーメーションでありますとか、マネジメントでありますとか、あるいは女性の活躍といったような切り口から中尾先生にコメントをいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○中尾（コメンテーター） 皆さん、こんにちは。株式会社DX経営研究所の中尾と申します。改めまして、おしの農場の押野社長、天皇杯受賞、誠におめでとうございます。私は現在、DXという切り口から、全国の中小企業や農業者の皆様に対して、経営改善の伴走支

援を行っております。実は私自身、熊本のお茶農家の出身でもあり、押野社長のお話を伺いながら大変感銘を受けておりました。農業経営の承継の難しさや、継続していくことの大変さについては、幼い頃から実感してきたところです。だからこそ、持続可能な農業を実現するうえで、先ほど長女様がお話しされていたようなデータの活用や、デジタル技術の適切な導入が、今まさに重要な時代になってきていると感じております。

おしの農場様の経営において特筆すべき点は、スマート農業の推進にあたり、単に農機を導入すること自体を目的とするのではなく、それを活用して持続的な経営を実現するという明確なビジョンに基づいて取り組まれている点です。また、経営判断においてデータを有効に活用されていること、さらに女性を含めた持続可能な農業モデルを構築されていることも大きな特徴だと感じております。まさに将来を見据えた経営を実践されていると言えるでしょう。

中小企業の事例に目を向けますと、さすがにDXという言葉が「デラックス」と誤解されたり、その意味がわからないという方は少なくなってきました。しかし統計によれば、DXを進めていると回答している中小企業のうち、およそ8割が「取り組んでいる」と答えている一方で、実際に成果が出ていると感じている企業は6割に満たないという結果が出ています。つまり、ツールは導入したものの、経営に十分活かされていなくてというのが現状でございます。

そのような中で、おしの農場様の場合は、決して安価ではないスマート農機への投資を行いながら、130ヘクタールという広大な農地を10人足らずで持続的に運営していくために、従来のやり方では限界があるという課題認識のもとで導入を進めてこられました。この点は非常に優れていると感じております。このように見ていくと、おしの農場様の経営は、「見える化」「データ化」「作業の標準化」、そして「意思決定の高度化」といった、スマート農業の模範的な事例であると同時に、経営DXの真の成功事例であるとも言えるのではないかと考えております。

そのうえで社長にお伺いしたいのですが、スマート農機は大規模で高機能である分、導入コストも相応に高いものと認識しております。こうした投資にあたって、資金面や費用対効果について、どのようにお考えになりながら導入を進めてこられたのか、ぜひお聞かせいただければと思います。

○中谷（コーディネーター） では、まず押野さん、お願いします。

○押野（業績発表者） ありがとうございます。スマート農機、今はクボタさんのものは

全部通信がついているので、すべての機械がスマート農機、そんなふうになっていると思います。資金に関しては、一番は様々な国の事業活動をさせていただいて、補助金をもらいながら、それを有効に使わせてもらっているということが一つ。あと、私どもは会社になってから日が浅いのですが、そんな感じで借地農業をし始めてからもう四十数年たっているということで、様々な設備を少しずつ増やしてきたということで、急激に面積を増やしたわけではないので、その点はちょっと余裕があるかなと思っています。

費用対効果ですが、農家の皆さん方、皆さんが必要であるわけでもなくて、そういうスマート農機を必要としない農家さんもいっぱいいらっしゃる。必要でない方がただ単にスマート農機を買ったからよくなるということは一切ないと思っているので、要らない人は要らない、無駄な投資になるかと思いますが、必要な方にとっては、これ以上、安い投資、安いと言うと語弊があって、クボタさんには言いづらいのですが、効率的な機械だと思っています。やはり私どもは人を雇用している、若い社員を雇用している、その人たちの給料なり、将来の生活を考えると、人1人を雇う、人生を背負う、そのコストというのはものすごく高い。それから考えれば、スマート農機を使って効率的にできるのであれば、人件費から比べれば、機械としての費用対効果は十分あるし、将来、人口が減っていくという中で、人がいない、人がいないと抗ってもしようがないので、人がなくなるということ的前提に、これからはロボット農機も入れていかなければならないなと思っています。うちではそういうふうに進んでいったほうが全然効率的だし、いいのですが、私どもの真似をした農家が全ていいというふうには言えないのかなと思っています。

○中尾（コメンテーター） もう一ついいですか。先ほどA Iの話が出たのですが、これは日菜子さんに聞いたほうがいいのかもかもしれませんが、現在、いろんなA Iが出ていますよね。今、使って、これはいいよみたいなものはありますか。

○押野日菜子（おしの農場） 今、A Iはすごく発達しているし、さまざまなA Iがあると思うのですが、私、そんなにA Iに詳しくないのであれですが、よく使うのは、ザルビオさんにもチャット機能が入ってまして、わからないことがあったら、A Iのチャットに聞くというのを結構使っているんで、そういう圃場管理のシステムであったりとか、栽培管理のシステムの中にそういったものが組み込めると、すごく使いやすいかなと感じています。

○中尾（コメンテーター） 本日は関係者の皆様もいらっしゃると思いますが、農業というのは本質的にデータによる管理が非常に重要な分野であると考えております。これま

での10年間に蓄積されてきたさまざまな栽培データがあるのであれば、それらを生成AIに取り込むことで、どのような栽培管理がより優れているのかを分析したり、さらにはシミュレーションまで行えるようになれば、非常に有効なデジタル技術として活用できるのではないかと思います。例えば、作業内容に応じた適切な人員配置といったことも可能になってくるでしょう。

おしの農場様で実践されている、いわゆるスマート農業が、AIの活用によってより身近なものになれば、導入に対する心理的なハードルも下がり、「自分たちにもできるのではないか」と感じていただける方が増えていくのではないかと、DX推進の立場として期待しております。ぜひ今後のさらなる発展に向けて、取り組みを進めていただければと思います。本日はありがとうございました。

○中谷（コーディネーター） 中尾先生、ありがとうございました。それでは、ちょっと視点を変えて、県の行政、あるいは普及といった観点から山形県の矢野様からコメントとご質問をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○矢野（コメンテーター） 山形県の農林水産部県産米戦略推進課の矢野と申します。この課の名前、県産米戦略推進課ということで、米だけをやっているように見えるのですが、大豆なども含めた畑作物全般の生産振興を担当しております。

おしの農場の皆様には、日ごろから、ずっと前からですが、研修会の会場にさせていただいたり、様々な調査をさせていただいて、データを提供いただいたりと、県にご協力いただいております。大変ありがたく思っております。今回、おしの農場様においては、地域の担い手としまして、農地を集約したり、スマート農業の導入、それから娘さんたちを始めとする担い手の育成に取り組まれているということだと思います。歴代の担当者に、押野さんと付き合ってきて苦労したこと、それからうまくいったよかったこと、どんなことがあったかというのを聞いてきたのですが、苦労したことが意外とないということ聞いています。それはなぜかといいますと、押野さん、性格的に非常に前向きにいろんなことに取り組んでいただけるということで、県がダメもとでお願いしたことを全て引き受けていただいているということもあって、さらにその取り組みが非常にうまくいっているところがあって、その結果として成果が見えてくる。普及課としても普及員冥利に尽きるというか、非常にうれしい付き合い相手だということをお聞きしております。

今回、大豆の共励会でまずチャンピオンになったということですが、特に生産面積がこのようになりかなり大規模に経営されて広がっている中で、通常ですと、疎かになりがちな基

本技術、たとえば大豆ですと、土作りとか、排水対策とか、当たり前のことなのですが、経営面積が大きくなってきた場合に、どうしてもそういうのに手が回らないという話が出てきて、全体の収量が少しずつ落ちていくということが一般的であるかと思うのですが、おしの農場様におかれましては、誠実に生産に向き合っているところが非常に素晴らしいと感じたところがございます。その結果として、最近、非常に高温で厳しい気象条件という中でも、安定して高い収量、品質を維持することができているのかなと思います。

現実的なものはさておいて、押野さん、なぜこんなに前向きに取り組んでいただけて、かついろんなことに誠実に向き合っていけるのかな、これまでどういうふうな経験をしてこういう考えに至ったのかなということを過去の普及員と話して、聞きたいなと思ったところです。いかがでしょうか。

○押野（業績発表者） 一番むずかしい質問で、自分のことだからよくわからないですが、普及員さん、今日、ここにいらっしゃる方はほぼ私の面識のある方で、大変お世話になった方ばかりなので、私の会社は、娘から言わせれば、逆に普及員の先生方、県の職員の方、国の方、様々な方が私どもの会社にいらっしゃって、いろんな話をしてもらえるということこそが私の会社にとっては一番有益なことだということがわかっているので、いつでもウエルカムで、何かあったら来ていただきたいというのは、私の会社の都合で皆さんに来てもらっているみたいなもので、やはり私たちは地域の中でずっと生きているので、世の中の情報、さまざまな幅広い情報、それに飢えているのですよ、私も、娘も含めて。そういう中で、県の方、役人の方が来ていただいたり、私どもが出向いたりして、さまざまな話をさせていただくということが私の会社にとって一番大事だからこそ、そんなふうにつき合いをさせてもらっているのです。何をそんなに面倒なことをするわけでもなく、それはお互い、こんないい情報をもらったんだから、うちのほうもこんなふうなお手伝いできればなど、そんな感じの付き合いかなと思っています。

あとは、私は高校を卒業してから、ずっとこの仕事しかしていなくて、この仕事でここまでちゃんと生活して、農業をしていけるという自信もなかった中で、どういうふう在世の中が転んでいったのかわからないですが、最終的には娘まで引き継ぐような農業経営者になったというのは、それも不思議な感じであって、本当に何も無いのです。世の中がこんなふう動いてきただけだし、もしかすれば、地域の皆さんが農地を離さなかったら、私の農場はなかったし、もしかして新しい社員が入ってこなかったら、今の経営もなかったし、本当に周りの人に助けられて、こんなふう本当に運よくここまで来たなというのが

実感で、こんな賞をいただいたのも、身に余る榮譽ですし、何十年ともらってきた前の受賞された先輩方を見ますと、錚々たる方々がいらっしやって、今もって、こんな賞をもらって、ちょっと恥ずかしくて困ったなというところも少しまだ残ってしまっていて、どうにか皆さん方にこれから娘ともども恩返しできればなと思っているところなのです。

○矢野（コメンテーター） 大変ありがたいお言葉で、こちらも感謝したいと思います。ありがとうございます。

○中谷（コーディネーター） ちょっと関連で突っ込ませていただくと、県が様々な農業政策を打たれていますよね。その中で押野さんにとって一番ありがたかった、あるいは一番役に立った政策はどんなものがありますでしょうか。

○押野（業績発表者） 全て役に立った。私は、今まで皆さんとお付き合いして、気軽に困ったことを普及員の方、県の職員の方に電話して聞けるというのが最高の財産で、最高にいいことなのですが、一番思っているのが、多分十何年前になるのですが、山形県独自で、村育支援プロジェクト、多分、吉村知事が入って1年目でされた政策なんだろうと思うのですが、そのときに私が採用されまして、そのときに様々な設備、機械を入れたことが規模拡大の第一歩かなと思っています。規模拡大の第一歩を押していただいたのが山形県、どなたが考えた政策かはちょっとわからないのですが、お会いしたときに知事にも感謝の言葉を言ってきたのですが、それが山形県では一番です。

山形県の政策が多分国の政策と一致していて、私は国の政策もおもしろいなと思っています、そのとおりにやってきたし、ここ四十年、転作もずっとしてきた中で、やはり土地利用型の農業、特に米に関しては国の政策が全てだと私は思っていて、その決まった政策の中で私ども農業者が一番いいチョイスをしながら農業経営をしていくというのが私たちの会社のスタイルです。なので、5年水張りがなくなったときにはちょっとびっくりしたのですが、それはそれで、それに合わせながらしてきたし、多分、来年からまた大きく変わるらしいので、それが国のほうから来て、もしかすると、県のほうで独自の政策が出るのかもしれないですが、それを踏まえながら、私たちはそれに合わせて、必要なものを必要なだけつくって、できることは、それをなるべく低いコストで作ることかなと思っているくらいです。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、私のほうから。私は自己紹介をしていませんでしたが、もともとは農業技術の研究者ですので、ちょっと狭くなってしまいかもかもしれませんが、技術的な側面についてご質問させていただきたいと思いま

す。

先ほどから出ていますように、大豆を毎年 300kgとっていくというのはわれわれ研究者から見てもすごいことだと思います。それで、もちろん様々な技術を導入されていると思うのですが、押野さんから見られて、一番効いた、ポイントとなる技術は何だったのか、感触をまずは教えていただけないでしょうか。

○押野（業績発表者） 私は大豆を始めてまだ7年、そんな感じなのです。一番初め、始めるに当たって、うちの地域で大豆をしているのは隣村の集落営農の8haが1人だけなので、天童市内においては一切わからない。普及課の先生から聞きながら、山形県の研究センターから聞きながら始めたので、基本しか知らないし、そのとおりにやってきたというのが多分増収の決め手なのかもしれないです。その中で一つと言われれば、私どもの周りの圃場は田んぼに最適な圃場農地です。なので、排水が悪い。地力は粘度質でものすごくあるのですが、排水が悪いという圃場です。なので、排水対策さえしっかりしていれば、地力はふんだんにある圃場なので、大豆も最適で収量が上る。それはやはり何年かしてきた中で確信的に思えることで、地力があるからこそ、連作してもほぼほぼ取れる。それはその土地柄だと思っているのです。皆さん、私の地域、周りの市町村でも、捨て作りとは言いませんが、大豆はやはり転作の、生産調整の一つのツールとしてとらえている人が多くて、ほどほどでいいやという方々はやはり排水対策もしないし、さまざまなので、山形県の収量は落ちているのかなと思っていて、私どもは排水対策を徹底的に、まずはそれをしたら、今のところ収量は落ちないでいっているの、それは引き継ぎしたいな。それが一番だと思っております。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。排水対策ということだったのですが、的確な排水対策をするのは、それなりに手間とコストがかかると思うのですが、そのあたり。それからスマート農業の掛け合わせというところで、何か新しい工夫とか、今後こんなふうにしていきたいみたいなことがあったら、お聞かせ願えませんでしょうか。

○押野（業績発表者） コストの面は、多分、ちょっと無駄なぐらいコストを使っているのかなという気もするのですが、うちの下の娘は大豆担当で、山形県の大学でも大豆ばかり勉強してきたので、それが好きみたいで、やはり社員には好きなことは、今のところ、金がかかってもとことんやらせようと思っていまして、排水対策は手間隙かかって面倒なのですが、300kgの収量が上れば、多分報われるんじゃないかなと思いつつ、コストを排水対策にかけています。

スマート農業との関連については、大豆はやはり畑作なので、さまざまな作業をするのに自動操舵機械も使うし、ドローンも使いながら、便利よく使っていて、今度、ザルビオなりで、雑草の予測なんかもできそうだということも聞いていまして、畑作に限らずお米もなのですが、まだまだ将来性があるって、コストを削減できるところがあるのではないかなと思って大変期待しております。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それから、おもしろいなと思って聞かせていただいたのは、稲のための大豆作という視点をお持ちということなのですが、今のところ、連作でというお話もありましたが、稲との組み合わせという意味で、どういう関係みたいなものが押野さんの経営には一番向いているというふうにお考えですか。

○押野（業績発表者） 私の経営ではなくて、大豆、稲のために思えば、やはり完全なローテーションが大豆にとっても一番よくて、稲にとってもいいというのがわかるし、そういうふうに、雑草も少ないし、いいなと思っているのですが、うちのところは、地域の農地をお借りして、やはり良くないところは嫌がってなかなか言えないし、そこも引き受けての農地の集積ということもあるので、条件の悪いところは大豆にしたいということで大豆にいつているのです。稲にとっての大豆ということで、稲はやはり用水、水が必要なもので、これくらい全地域お借りしていると、やはり水の来ないところもちろんありますし、なかなか水が溜まらない農地も先ほど言ったようにある中で、やはり水の便が悪いところは大豆にすると、夏の管理、水管理、田んぼの管理が楽になる。それは 100haの水管理をなるべく楽にするためにも、社員たちに聞きながら、ここは水が来なくて管理が大変なところを、大豆、もしかしたら違う畑作物にかえることによって、精一杯、ぎりぎりの面積を水稲作に張れるということがあって、そんな感じで大豆を条件の悪いところに行っているのですが、多分、今から大豆がどんどん増えていったら、少し条件のいいところも大豆を入れて、条件がよくて、水があるところは、夏の大豆の灌水もしたいし、ローテーションもかけたいなと思っていて、これからは多分大豆を増やしていくので、そっちの方面で固定化になりつつも、なるべくだったら、ローテーションのできるころはしたい、そんな思いでおります。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。では、稲のほうで少し伺いたいのですが、乾田直播もチャレンジされて増やされているというお話をいただきましたが、その中で、乾田直播はいろんな方式があると思うのです。愛知方式のV溝を採用されたということなのですが、V溝を選ばれた理由をもう少し詳しくお聞かせ願えますか。

○押野（業績発表者） 乾田直播は私どもの大事な基幹になっていまして、離すことができない、そんな技術なのですが、私どもの知り合いが東北管内一円にいて、多分、福島の太平洋側は宮城、岩手、それもドリルシーダーで、小麦、大豆と一緒に、そんな形の乾田直播体系を確立していらっしゃるの、それはすばらしくいいと思います。ただ、日本海側で積雪があるので、春の農作業中にドリルシーダーで種を蒔くような圃場を準備できないというところが多くて、うちは秋に代掻きして、春、乾くのを待って、4月の中旬、下旬に種を蒔くという、愛知方式のV溝型をしているのです。あと、私どもよりもうちょっと積雪が多い山形の若い農家の方がこの前来て、ニプロのスリップローラーシーダーといますか、それで一発耕起、一発種蒔きの乾直で今年は試したい、それしかないかと、積雪の多いところの若い経営者の人は言っていました。それはそれで正しくて考えるなどと思って、雪が消えて、田んぼに入ってから水が入るまでの期間が短いのだったら、やはり一発播種できる、そういった機械がV溝の播種機よりももっと適しているのかなと思ってます。そんな感じでいまして、私ども、天童地域、当地域においては、V溝が一番合っているなという今のところの結論で、青森あたりの方も、山形の私の知り合いも、やはりV溝のほうにいてる人が今のところは多いです。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。近県もご紹介もいただいて、本当に助かります。さらに突っ込みますが、先ほど大豆は次女の方が学校で一生懸命取り組まれたというお話がありました。そうすると、現状、直播はどういうふうに技術取得されたのですか。

○押野（業績発表者） 一番初めは、天童市で多分どこかにV溝直播の視察に行ったのを聞いて、それをしてみないかというのが初めで、技術的なことに関しては、愛知県のマニュアル、そのとおりです。それ以上の何もなくて、多分今はそのとおりにしている感じなので、愛知県の技術のみで意外に合っとうまくいっているの、それから新たに変えることはなくて、それをずっと踏襲しているというところなんです。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、ちょっと視点を変えて、押野様の経営の一つの特徴は女性の活躍というところかなというお話もさせていただきましたが、その辺について、中尾先生、何かコメントと、何か押野さんの取り組みを引き出すような発言をお願いしたいと思います。

○中尾（コメンテーター） 女性活躍というと、何か特別な取り組みをしなければならないと捉えられがちです。しかし、本日のおしの農場様のお話を伺っていると、もともと非

常に大きな面積を少人数で担わなければならないという状況があったわけです。これは従来のやり方では到底成り立たないものでした。つまり、1戸1戸の農家がそれぞれ農機を所有し、田植えから防除、収穫までを個別に行うという形では、もはや管理しきれない状況であり、加えて人手不足という課題もあった。その中で、省力化やデジタル技術、スマート農機の導入が解決策となっていったのだと思います。

その結果として、すばらしい娘さんたちが活躍できる土壌が生まれ、女性が活躍できる環境が自然と整っていったのではないのでしょうか。娘さんがお二人とも事業を継ぎたいと思われたという点は、皆さんも感じられている通りだと思いますが、そこには押野社長の経営者としての考え方、すなわち「地域に活かしていただいていることへの感謝」という想いが根底にあるのだと思います。そして、「この農地を守る」という明確で揺るがないビジョンを大切にしながら仕事に向き合ってこられたお父様の姿を、娘さんたちはずっと見てこられた。その姿に若い世代も共感・共鳴し、現在のおしの農場様の発展につながっているのだと感じます。

また、とても印象的だったのは、農業でありながら「当たり前の会社でありたい」という考え方を持たれている点です。例えば福利厚生や有給休暇の取得、さらには就業規則についても、一般企業以上にしっかりと整えられていると伺いました。関わる人を大切に、地域をより良くしていきたいという変わらないビジョンがあるからこそ、そこに共鳴して「農業に関わりたい」と娘さんたちも思われたのではないかと感じています。その結果としての女性活躍なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○押野日菜子（おしの農場） ありがとうございます。おしの農場の押野日菜子です。本当に私もそのとおりで思っていて、結構、いろんなところで女性活躍というと、料理が得意だと六次化のほうにいたりだとか、カフェを出したりとか、そういった面で活躍されている方が今まではすごく多かったなと感じていて、私と妹の場合はまたそれとは違って、今、中尾さんがおっしゃられたように、男性しかできなかったこと、スマート技術とか、そういうものを取り入れて、できるようにしたというところで、今回、女性活躍というふうに言われているのなと思っています。

私たちも農業を姉妹で継ぐのが珍しいとおっしゃっていただくことが多いのですが、私は、父とか、家族の中での考え方をそのまま昔から受け継いで聞いてきたというものもあるのですが、同じ農家の出身でも継ぎたいと思う人と継ぎたくないという人の違いは何なのかなと、同級生でも、農家の出身だが、農家を継がないという選択をしたという方もいっぱい

いるので、そういう方の話を聞いていると、幼いころから、作業要員の一人として、こき使われていたみたいな感じのイメージをしている子たちが継ぎたくないというふうになっていて、先ほど父の講演にもあったと思うのですが、父自体が昔から女性だから余りできないと思っていたというふうに先ほども言っていたと思うのですが、それもあったのか、私たちは余りこき使われたというイメージはなくて、幼少期から一緒に楽しく遊んでいたという感覚に近いのかなと思っています。なので、そういった感覚で昔から農業というか、農家というものを見てきたからこそ、こういう選択になったのではないかなというふうに感じています。

○中尾（コメンテーター） ぜひその流れで、お父様は素晴らしい農業をされてきましたが、日菜子さんはどんなふうな農家になりたいですか。

○押野日菜子（おしの農場） 私は、今までは家族経営だったのですが、社員も、身内じゃない人が入ってくる中で、おしの農場に関わってくれた人をハッピーにしたいというか、私に関わってくれた人によくなってもらいたいと思っています。なので、仕事の中でも、みんなが楽しそうなスマート農業もそうですが、たとえばカメラが趣味の子とかは、その仕事の中でSNSに使う写真だったり、ホームページに使う写真を撮ってほしいなと頼むと、仕事の中に少しでもその子が好きな趣味とか、そういったものを取り入れたり、そういうふうにして新しいことに挑戦していけるのもあったなというか、増えてきたなという感じがするので、農業の中でも個人個人が得意なこととか、好きなこと、そういったものを取り入れた経営をしていきたいというか、最近はそのように思っています。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。ちょうど将来の話みたいなお話になってきましたので、おしの農場さんの将来像についてディスカッションしたいと思うのですが、2km圏内で農地を集積されてきて、集落内のかなりの部分を集積されたというこれまでの実績だと思うのです。140haという規模に育った、この先の展開、ますます面積を増やしていく展開なのか、あるいはご講演の中でおっしゃっていましたが、まだ基本的には区画は30a区画、あるいは10a区画のものもある。そうすると、方向性としては、面積的には拡大というものと、それから作業効率を考慮して1筆の面積をどんどん増やしていくという方向性も考えられます。それから、今、娘さんが少しおっしゃっていましたが、六次化みたいな方向もないことはないと思うのですが、どういうビジョンをお持ちでしょうか。

○押野（業績発表者） 8割ぐらいは、うちの次の若い社員たちに託すということなので

すが、面積は私が今までずっとしてきた中で、がむしゃらに増やしたいという思いだけではなくて、これからも地域の方が私の会社を指名で、「おしの」に預けたい、そんな思いがある方が来たら、それはできるだけお引き受けしたい、そんな感じで、多分これからも少しずつ少しずつ増えていくんだろうなと思っていて、行った先でさまざまな作業体系なり、作物なりは、私の次の世代が違う方向に行くのかもしれないですが、基本はうちは農産物を生産する、そういうふうなことが基本なのではないかなと今も思っています。

六次化は、やはり羨ましくて、若い社員ともいろいろ話して、六次化をしている皆さんを見ると、したいな、いいな、儲かっていそうだなと思いがらいるのですが、どうしても私たちにはその技術がないというのがはっきりわかっているんで、販売力がないし、企画力がないということがあって、それはできない。なので、今からそんな営業力の強い社員がうちの会社に来たいなということがあったりすれば、その社員の腕がふるえるところを作ってみるのもいいかなと思うのですが、今、ちょこちょこ面積が増えていく中で、だんだんと飽和状態で、今、来ているのは、耕作放棄地のようなひどい農地がどんだんうちのほうに来ているので、その管理をきちっとするためには、多分、この社員の中ではこの二、三年は本業に徹するしか余力はないのかな、そんな感じで思っています。将来、どうですか。

○押野日菜子（おしの農場） そうですね。やはり毎年、面積が増えてきた中で、スマート農業のデータを使ってベテラン社員から若手に引き継ぐということに注力してきたのですが、やはりほかのことに手を出すというか、新しいことをしてしまうと、まだ若い社員も働いてから4年未満とかの子たちが多いいので、まずは今ある面積というか、今から増えていく面積を若い社員だけで回せるようになるというところがまず一つ最初の目標として考えているところではあります。

○中谷（コーディネーター） そうすると、結局、将来方向を考えたときに、今、社長さんも、娘さんも、一番の課題とっておられるのは人材育成というふうに理解してよろしいですか。

○押野日菜子（おしの農場） はい。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。私、商売柄、ついつい聞きたくなってしまうのですが、そういう将来方向を考えたときに、こんな技術が欲しいな、こんな展開を図るのにこんな技術があったらいいなというようなことがあったら、リクエストしていただけますか。僕らも頑張りますので。

○押野（業績発表者） 私は乾直をしているのですが、ある程度、V溝でできると言いながらも、まだまだできない圃場がいっぱいあるし、将来は田植えがなくなるような、そんな世界。もしかしたら、基盤整備の事業が必要なことかもしれないですが、やはり私は昔からしているから、そこから離れられないのですが、多分、娘たちはロボットか何かであるのかもしれないし。

○押野日菜子（おしの農場） 将来の技術は、やはりかっこういいなというか、おもしろそうだなと思うのは、北海道とかで試験でやられていると思うのですが、机に座って、いろんなモニターを見ながら、3台のトラクターを動かすだとか、そういったものはすごくゲーム性があると言うと変ですか、どうなのかわからないのですが、そういった感じで、この会場の後ろにあるドローンのシミュレーションゲームもそうですが、そういった形で楽しめるものがあると、もっとワクワクするなというか、そういうふうには感じます。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。頑張ります。

それでは、お待たせしました。会場からのご質問をお受けしたいと思います。会場の方、ご質問のある方が挙手をお願いします。所属とお名前を教えてください。よろしくお願います。

○会場 農研機構東北農業研究センターの狗巻と申します。乾田直播のところでお伺いしたいのですが、直播栽培であれば、湛水直播のほうもあるかと思うのですが、そちらのほうではなくて、結構、日本海側だと湛水直播のほうも入っているところが多いと思うのですが、天童のほうではV溝がよかったというのは、湛水直播と比べてもどういうところがよかったのかというのがあれば教えていただきたいです。どうして湛直は選ばれなかったのかというか、何かデメリットがあったのか、それともV溝のほうがこういうメリットがあったとか、そういうことがあれば教えていただきたいです。

○押野（業績発表者） ありがとうございます。湛水直播は、クボタファンなので、鉄コーティングで3年くらいしたのですが、3年して嫌になって売ってしまったのです。全然違う技術だと思っていまして、普通に湛水は代掻きをしてするのだったら、そこまでいったら、圃場を作ったら田植えをしたほうがいいんじゃないかという私の考えで、乾田直播は作業をする時期も違うし、できる面積の規模感も全然違うような感じがしていて、やはり夢があります。だから、今回も多分農研機構さんとか、山形県の方がうちに試験に入られるというのは、春に作業でなかなか乾田直播は取り入れができないということで、代を掻いた後にV溝をするのではなくて、そこを高速でドリルで走られないかという試験をす

るそうです。やはり日本海側においても、ドリルシーダーを使った高速作業、そういうものをしてみたいというのがあるんじゃないですかね。私もそれも夢があるなと思って期待しております。

○会場 ありがとうございます。秋田の大潟村でも、東北の形式の乾田直播が入っているところもありますので、山形とかの日本海側でも、そういうものができるようになると、もっとメリットになっていいのかなと思います。ありがとうございます。

○中谷（コーディネーター） そのほか、いかがでしょうか。

○会場 栃木県からきました〇〇と申します。今日は貴重な講演、パネルディスカッション、ありがとうございます。押野様と娘さんにお聞きしたいのですが、継承がこれからの一番の最重要な項目なのかなと今日聞いていて思ったのですが、継承するに当たって、どういった方を相談相手としているか、あるいはどういった専門知識、こんなものがあったんだみたいに参考になったというものがありましたら、教えていただければありがたいです。

○押野（業績発表者） ありがとうございます。いろいろお聞きしているのは、やはり普及課の先生方です。専門的な担当の方もいらっしゃるのですが、その方にも相談したりしたのですが、大体のスケジュール、いろんな方に聞いても、5年、10年がかりで、少しずつ、どなたから聞いても同じで、成功する、しないかは、やはり社長が社長の椅子を渡せるかどうか、それしかないんだよということでした。社長が任せると言えば、それで事業承継は終わりだということで、上手にうまく引き継いでも、やはり引き継いだ人は失敗もするだろうし、それはどんな感じで引き継いでも失敗するのだから、やはり思い切って任せるしかないんだなというのが、最終的に、いろんな人の話を聞けば、事業承継がうまくいかない原因はすべて現在の社長がしがみついているからだ、そんな感じに思っています。なので、うちは失敗してもいいから、さっき話しましたように、もしかすると、あと3年くらいで、やはり社長の椅子が温かくて離れられないということがあったら、みんなから叱って笑ってほしいということなのですが、それは社員にも言っていて、社員の問題もありますよね。あと、お客さんの問題もあります。事業承継して、そんなやつを社長にするのだったら、心配で農地を貸せないとか、そんな社長だったら、おれはこんな会社に入れないよ、そんな感じになるのであれば、それはどこかの段階でストップして、違う社員にさせるとか、俺がもう一回舞い戻るとか、そんな感じになると思うのですが、今の段階で、社員の人はずっと言い続けているので、それを踏まえて若い社員は頑張ってい

ますし、うちの地主の人も、うちの娘ともコミュニケーションが大分取れてきているので安心はしているのですが、あとは私の決心の問題だと思います。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

○会場 ありがとうございます。押野様にお伺いしたいのですが、事業承継のことで、たとえば親子の間で営農に関して意見が異なる場合なんかが出てくる場面があるのではないかと想像するのですが、そういったときにどういう判断をするか。そのときにデータがあるということが、お互いの意見をぶつけるときの何か役に立っているのか、このあたりのことについて少しお聞かせいただけないでしょうか。

○押野（業績発表者） もしかすると、意外に感情的な部分でぶつかるところが多いかもしれない。それとちょっと離れるかもしれないのですが、うちは若い世代に事業を移すということは社員にも言っているので、作業を決定するに当たって、若いグループに任せるというのを去年ぐらいから始めたら、やはりみんな責任感があるのかどうかかわからないですが、意外に意見を言い過ぎて揉めるようになりましたよね。今までは社長のトップダウンで、ああしてほしい、こうしてほしいと、言うことを聞いて「はい、はい」と言っていたのですが、今度は若い人たちが中心で決めてと言ったら、まあ、揉めるのですね。でも、それは仕事のことで揉めるのです。今回の新年会は波風立たなくてよかったなど、そんな感じできたくらいなのですが、それも私としては、こんなに揉めるなんて、普通の会社っぽくなってきたなというふうに喜んでいて、どんどん揉めてほしいというのがあって、それは親子間でもこれからは多分揉めるでしょう。今はまだ経営のことは半分ぐらいしか教えていないので、今度、完全に移したときに、じゃ、何億円の投資をしたいとかとなってきたら、もしかしたら、それは全力で止めるかもしれないし、その辺が、まだ私も椅子から降りたことがないので、わからないのですが、でも、それは多分親のほうが引かないと駄目なのかなとは親心ながら思う。それは親子の事業の引き継ぎですからね。それが他人となれば、もっと厳しい局面が出てくるのかもしれないですが、何ととっても親子ですし、結局、私が甘いのかもしれないですが、私の農業は家業なのですよね。うちの家業の農業、うちの子どもたちが生まれて、幼稚園に行って、学校に行って、育て、その全てはうちの家業のおかげで娘たちが育ってきたというのは、やはり娘だからというか、家族だからわかるころなので、そこはちょっと安心しているところがあって、そんな感じに家業を放り出さないな、そんなに適当にしないでらうなと思っているから、もしかすると、じゃ、移すよと言えるのかもしれないですね。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、そろそろお時間が迫ってまいりましたので、最後に各コメンテーターの方から一言ずつコメントをいただけますでしょうか。まずは宮武さん、お願いします。

○宮武（コメンテーター） 宮武でございます。押野さんのところ、これからも耕作放棄地になりそうな圃場も含めて地域の農地を守っていかれるということで、すでに集落の農地の3分の1が押野さんのところに来られているということで、これから圃場を守るだけではなくて、農道であるとか、水路であるとか、そういうところの維持管理も出てくると思われます。それから獣害対策とか、そういった生活環境を守っていくようなところもこの会社に期待が集まってくるのではないかと思います。その辺も含めて、これからますます大変になっていくと思いますが、経営のほうを発展させていただければなと思いました。どうもありがとうございました。

○中谷（コーディネーター） 中尾先生、お願いします。

○中尾（コメンテーター） 本日は大変有意義な議論ができ、心よりうれしく思っております。ありがとうございます。最後に、スマート農業とDXの関係について、少しお話しさせていただきます。

スマート農業は、どちらかという技術的な側面、いわば入り口にあたるものですが、本日のお話は、まさにDX、すなわちデジタルトランスフォーメーション、経営そのものの変革に関する内容であったと感じております。DXとは、感覚に頼った経営からデータに基づく経営へ、そして属人的な経営から持続可能な経営へと転換していくことであり、まさにおしの農場様がこれまで実践されてきた経営そのものではないかと思います。

スマート農業が単なる省力化のための技術にとどまるのではなく、地域に経営を残していくための基盤となるよう、今後も地域を守りながら、データを活かした農業DXの経営体として、さらに発展されていくことを期待しております。またこれからは、自らの経営において「どこが見えていないのか」を問い直し、そこを深く掘り下げていくことが、DXの本質であり、それが持続的な農業につながっていくのではないかと考えております。

今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。本日はありがとうございました。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それでは矢野さん、お願いします。

○矢野（コメンテーター） ここまで成功されてきたのは、やはり押野さんのご本人の人柄とか、経営の力が長けている点とかが非常に原動力となっているのかなと思ったところ

です。今もお話がありましたが、これから継承も考えておられるということで、これから娘さんたちの活躍も大いに期待したいと思います。これからスマート農業を活用しながら地域の担い手として県としても全力でサポートさせていただきたいと思いますので、本県の農業の牽引役としてますます発展していただければというふうに思います。よろしくをお願いします。

○中谷（コーディネーター） ありがとうございます。それでは最後に私から、とは言え、今、コメンテーターの方がきれいに取りまとめてくれましたので、改めて総括的に取りまとめをするということはありませんが、やはり今、3人の方が言われたように、しっかりとした経営理念と課題の認識、それからそれに対するある意味貪欲なソリューションを求めることといったようなことが経営の発展という上で非常に大切である。しかも、そのベースをやはり経営者の方のお人柄、これも極めて重要な要素であるということを改めて認識させていただいたような気がしております。余り取りまとめになっておりませんが、これにてパネルディスカッションを終了させていただきたいと思います。ご協力、どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 演壇の皆様、有意義な意見交換を誠にありがとうございました。また、会場からも熱心に参加していただき、またオンラインの参加の方々も誠にありがとうございました。以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。

本日の結果は、後日、内容を整理した上でほぼ全文を当協会のホームページにアップいたしますので、今後の参考にしていただければと思います。

なお、お帰りの際には、簡単なアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入の上、受付にお渡しください。オンラインで参加の方々は、ズーム会議から退室されますと、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答をいただくよう重ねてお願いいたします。

後ろのバーチャルの体験は、いま少し、4時半近くまでは対応できるかと思いますので、よろしかったらチャレンジしていただければと思います。

以上でございます。

本日は誠にありがとうございました。

（閉会）

令和7年度（第64回）農林水産祭  
（第42回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」  
（スマート農業技術とともに切り拓く地域の持続可能な農業）

発行 令和8年4月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03) - 6441 - 0791 (代)

FAX (03) - 6441 - 0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。

